

井上ひさし

ハイジャック



シャインハイム

井上ひさし



集英社

シャンハイムーン

一九九一年三月二〇日 第一刷発行

著者 井上ひさしいのうえ

発行者 若菜 正

発行所 株式会社 集英社

〒100 東京都千代田区一ツ橋二一五・一〇〇

編集部 (〇三) 三三三 〇一六 一〇〇

電話 販売部 (〇三) 三三三 〇一六 三九三

製作課 (〇三) 三三三 〇一六 〇八〇

印刷所 大日本印刷株式会社

© H. INOUE, Printed in Japan, 1991

ISBN4-08-772782-3 C0093

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら小社製作課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複写、複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

目次

第一幕 プロローグ

一 不整脈

二 歯痛

三 自殺願望症

第二幕 四 手紙と葉書

五 失語

六 快復かいふく

エピローグ

207 173 129 121 79 47 15 7

シャ
ン
ハ
イ
ム
ー
ン

九年間にわたって上海の地下に潜り、一管の筆を武器に文筆活動を行っていた魯迅は、蒋介石の国民党政府の軍警による弾圧が強まるたびに、さらに深く地に潜った。魯迅日記によれば、その避難行は前後四回（一九三〇、三一、三二、三四年）に及ぶ。この戯曲では、その四回の避難行が一回にまとめられている。そのために事実を多少とも歪めることを余儀なくされた個所がある。がしかしこの操作によって、魯迅の生活の真実は、より鮮明になったと信じる。

時

一九三四年（昭和九年）八月二十三日から九月十六日までの約一カ月間。

場所

上海市北四川路底（行止まり）内山書店二階倉庫。

人物

魯迅（五三）

許広平（三六）

内山完造（四九）

内山みぎ（四一）

須藤五百三（五〇）

奥田愛三（三九）

第一幕

プロローグ



六条のスポットライトの中で、六人の俳優がつぎつぎに魯迅の書簡を読み上げる。

一 わたしは六種類の文章を書いてきました。まず、口語体の小説や翻譯。つぎに、文語体の詩。それから、雜感文。^{ざつぶん}中国小説史研究家としての学者くさい論文。日記、そして手紙。書いていたのしいのは、断然、手紙です。日に少くとも三通は書くでしょう。切手代に使ったお金をそっくり貯めておいたら、この上海に小さな家が一軒買えたにちがいありません。

二 わたしの手紙、この魯迅の手紙は、すぐ焼き捨てること。蔣介石^{しょうかいせいせき}ひきいる国民党政府は、わたしだけではなく、わたしの手紙を持っている人間まで逮捕しようとしているか

からです。わたしに逮捕令が出ています。この首には三万円の懸賞金がかかっているといふ噂もあります。そういう次第で、わたしの手紙を持っていることは爆弾を抱いているよりもはるかに剣呑^{けんどん}です。

三 わたしの好物はなにかとのおたずねですが、それはもう、九月の上海に出回わるあの、卵を腹いっぱい^{めずがに}に孕んだ雌蟹^{とど}に止めを刺します。もっともこれをたべると、きまってお腹^{なか}が痛くなるのは奇妙ですが。いや、もっと好きなものがあつた。月です。月が好き。月夜の晩は、仕事部屋の灯り^{あかり}を消して、窓から流れ込む青い月の光を浴びながら、いつまでもじっと坐っています。それから月夜の晩の上海の街の佇^{たたずま}いもすばらしい。澄んだ川の底の街のように、汚いもの、みにくいものがすべて消え失せて、よいもの、うつくしいものだけが残ったかの如く見えます。

四 ノーベル賞選考委員会がわたしを文学賞の候補者に指名した。ついては、わたしに賞を受ける意志があるかどうか。そういうおたずねのお手紙、たしかに拝受いたしました。世界にはわたしよりもすぐれた作家がいくらでもいますが、彼等ははまだ受賞しておりま

せん。たとえば、わたしはオランダの作家ファン・エーデンの長編童話『小さなヨハネス』を翻訳したことがあります。わたしにはとても創作できない立派な作品ですが、その原作者のエーデンからして受賞していないのに、どうしてわたしにその資格があるのでしょうか。

五 からだはどうか保もっています。どこもかしこも悪いところだらけで、五年前に死んでいてもなんの不思議もないようなものですが、机の前に坐り、一本五銭の安筆やすふでをもつと、妙にシャンとする。三十年来の習慣というものは、おそろしいほどです。

六 あなたは、「日本で、魯迅先生の半生を、芝居に仕組んで上演したい」という申し出にお答えします。わたしには、あなたの無茶を止める権利も義理もありません。勝手になさるがよい。また、あなたは手紙の中で次のようにも書いています。「正確に考えれば、中国語だけ使われている場面は中国語で書かなければならない。中国語と日本語がチャンポンに使われる場面では、そのように書かなければならない。ところが、たいていの日本人は中国語がわからない。作者のわたしも中国語がわからない。いったいどうすれ

ばいいのでしょうか」。勝手になさるがよい。日本人が書いて、日本人俳優が演じて、日本人の観客が見物するとなれば、頭から尻尾まで、ただひたすら日本語で通すしかないではないか。

次の「七」の書簡は、魯迅を演じる俳優によって読み上げられる。

七 北京の母上様。ずいぶん長いあいだごぶさたいたしました。わたしの身の上になにか起ったのではないかと心配なさっておいでだったろうと思います。じつは、ちょうどひと月前のある夕方、学生風の三人の男に尾行され、これは危いと直感しました。途中で尾行者たちを撒いて大陸新村のアパートへ帰ると、こんどは、アパートのある一帯を目付きの険しい男たちが、なにやらくんくん嗅ぎ回っていたと、妻の広平が教えてくれました。蒋介石の手下ども、国民党政府の特務機関の連中がまたもやゴソゴソ動き出したらしい。そこでいつものように、内山書店へ避難することになりました。内山書店はアパートとは目と鼻の先、ぶらぶら歩いても五分とかかりません。

魯迅を演じる俳優に投げかけられていたスポットライトが消えていき、入れ替って、舞台全体へ滲むように照明^{あかり}が入りはじめる。

